

時評

佐藤洋一郎 総合地球環境学
研究所教授

意外と知られていないことだが、静岡県は桜と関係の深い県である。桜といえば今ではソメイヨシノがその代表だが、その系譜を研究した碩学、竹中要博士は三島の国立遺伝学研究所で研究生生活を送っていた。彼の研究によって、ソメイヨシノがエ

ドヒガンとオオシマザクラという二つの種の交配でできたことがわかったのである。竹中博士はそのことを、実際に二種を交配してみることで確かめたが、このときの実験で生まれたサクラは、「三島桜」の名で、三島大社の境内に植えられている。

静岡と桜

今ではDNAの研究によって、ソメイヨシノの場合には、エドヒガンが母親に、そしてオオシマザクラが花粉親(父親)になったことがわかっている。

ソメイヨシノが生まれたのは江戸時代のおわりころ。それ以前のサクラは、例えば吉野のサクラがそうであるようにヤマザ

クラの系統が多かったようだ。平安の歌人たちが盛んに「花」を詠んだころには、ソメイヨシノはまだなかったのである。なお、ソメイヨシノの名は東京の駒込付近にあった旧染井村という地名からきている。ソメイヨシノの生誕地は残念ながら静岡県ではない。

伊豆は1—5月が花の園

母になったエドヒガンは南方系のサクラで、河津町のカワヅサクラもこれと近縁のカンヒザクラの血をひいている。これらのルーツをたどればはるかヒマ

ラヤのふもとに達するといわれる。カワヅザクラはほかのサクラより早く花を咲かせるが、これは南方系の特徴のひとつであ

る。いっぽうのオオシマザクラはヤマザクラ系のサクラで、どちらかといえば列島の北半分に多く分布する。しいていえば、これは「北方系のサクラと言えなくもない。ソメイヨシノは南北

ところで桜餅に使うサクラ葉はオオシマザクラのものが多く、生産の大半を伊豆の松崎町産のものが占めている。

伊豆地方を中心として、県内にはさまざまな種類のサクラが自生している。とくに伊豆はサクラのメッカともいえそうな土地柄だ。自生するサクラから園

芸品種までを一同に会すれば、ちよっとしたサクラの園ができあがる。何しろ河津のカワヅサクラが1月下旬に咲き始めてから、種々のヤマザクラやソメイヨシノ、それに八重咲きの品種が次々と花の時期を迎え、最後にマメザクラが五月に花の時期を迎えるまで、一年のうちのカ月近くの間、サクラを楽しむことができるのだから。

執筆者略歴

さとう・よういちろう氏 京都大学大学院農学研究科修士課程修了。静岡大助教授を経て2003年10月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」(角川書店)「DNA考古学のすすめ」(丸善ライブラリー)など。